

て可能にされた一の對象に他ならずとし、これに經驗的性格と異る優越を認めないのである。

純粹客觀的の立場からは、著者も既に斷はられて居る通り、十分な典據を缺ぐとの批評が出るかも知れない。超越批評的の見地からは、もつと深い解釋が施し得るとの觀察が下されるかも知れない。然し此兩者何れも著者の目ざす所とは異なる立場である。

従つて其批評は必ずしも著者の念とする所に申しないと言ひ得る。然し亦此兩者の立場を出來得る限り包攝することも、著者の希はるる處であらう。そこで著者の立脚される内在組織の見地を充分に立證する爲めには、物自體をその歴史的由來と本文の依據とに於て基礎附けること、これが體系組織の構成要素としての働きを明瞭にすること、而して此概念の創造的價値を闡明することの三要件を満足させる必要があるであらう。第一については、たとへばカントの物自體がライブニッツのモナードの變容攝取であることを考證することなどは、物自體即個體と見る著者の見解に、一の有力なる歴史由來的基礎を與へるものであらう。此方面については、思ふに他日公にせんとを期せらるゝ詳細なるカント研究に充分究明せられることであらう。第二第三の點に就ては本書の前後二篇を通讀する人の容易に看取し得る如く、大なる程度に於ての成功を示して居ると思はれるのである。

私は今迄本書の第一篇だけについて、感想とも紹介ともつかぬことを述べて來た。然るに本書の殆んど中央を占めて居る第二篇研究及び補遺には、第一篇を補完すると云ふ以外に、一々獨立しても多大の價値ある論文七章が收めてある。就中第二章『ケルヘル

ム・キンドルバント』の如き、嘗て哲學雜誌に出た當時と變らぬ深い感興を以つて今度も讀まれたものである。學徒としての興味を動かし反省を促すものは、却つて此篇に多く發見されると云へるであらう。

大正六年は日本の思想界の仕合せな歳であつた。徹底せる批評と獨創的建設とに於て空前の高さと深さと強さとを示した『自覺に於ける直觀と反省』西田博士著の出たのが十月の初めであつた超えて十一月の初め新と大と精とに於て優に世界的地位を要求するに足る本書を獲た。斯様にして我國民的文化意識は世界的意義と妥當とを獲得し行くのである。而して此兩書が何れも私共の恩師の手になつたものであることでは私達の心筋かに自己の誇りとして感じつゝあることを言はずには居られない。又斯る名著を續々世間に提供しつゝある出版書店に對して厚き感謝の意を表したいと思ふ。岩波書店發行 定價二圓五十錢。(錦田義富)

心理叢書 第五册 國語のイマセント

文學士 佐久 間 鼎著

『抑、國語は國民の知能啓發の第一歩をなす最大切な道具であるのみならず、國際競争の優者の重大な資格たるべき國民精神の浮化装置であら、國語は區々たる學校教育のための國語ではなくて國人の精神生活を培ふ日常の糧であり、國民性情を養ふ米の飯である。かくの如く重大な意義を有する國語の研究に於て從來割合に満足な成果を收め得なかつた原因に就ては色々の見解もあらうが其研究の對象を現代の生きて動いてる國語に探ると言ふ事をし

なかつた事、及び、其の研究方法として採つたものが殆ど全く史的方法に限られて居たと云ふ事に加へて更らに國語の音聲學的知識の缺乏が科學的國語學の成立を妨げて居つた事に基くと云へる。従つて今日の急務は科學的國語學を確立すると言ふ事に存し其の順序として國語の音聲學的性質を明瞭として其の言語學的性質を充分に理解する必要がある。』以上は即ち本書の序説に依つてうかがわれる著者の抱負であり、此の著書の現はれた根本の動機であるが、此れは誠に正當なそして、眞面目な、一般に認められねばならぬ主張であつて平素此の方面に獨特の研究を積まれて居る著者の眞面目な著書として、本書に對し歡迎の意を表したい。本書は前後二篇に分かれたれ前篇は「國語の語調」と題し、第一章「標準音と訛音」第二章「連結音及音節」第三章「アクセントの意義」第四章「國語のアクセント形式」第五章「文の抑揚と語のアクセント」の五章を收め、後篇は「國定讀本のアクセント」と題し、先づ發音表記法の一般的注意を述べた後に、國定小學讀本卷一より卷四に至るまで順序を逐つて其のアクセントの標記を試みて居る。今極めて簡単に其の内容を紹介するならば第一章に於ては、國語の標準音として、東京方言のうち最標準的價値の多い教養ある中流人士の發音を採用する所以を述べ、之と地方々々の方言即ち訛音とを興味ある實例を以て比較し、第二章に於ては主として子音の有聲化、母音の無聲化等について簡明に説き、第三章に於てはアクセントの意義を論じ、夫れを大略、音節の有する重みと解して差支無しとなし、かくの如く音系列に於ける一定の輕重關係は如何にして生ずるかの問題に入り、其の要素として、時間的關係(長

き) 強弱關係(強き) 高低關係(高き)の三つを數へ國語に於ては就中「高き」が其の主要素なる事を説いて居る、第四章に及んではかくの如き、高低、換音すれば抑揚關係を主要素とする國語のアクセント形式は如何の問題に進み、實驗的研究の結果から種々の形式を夫々の適切な例に依つて示して居る、第五章は標準的發音たるべき東京語に行はるゝアクセント形式規定の言語心理に關する著者の推定を骨子として、言葉調子即ち文の抑揚關係が語のアクセント形式を規定する所以を力説し、更らに感情の表白と語調從つて語のアクセントとの關係を論じて居る、全體が簡明で要領を得て得る、發音の統一、標準音の普及は著者と共に、吾人も願ふ所であつて、廣く此の書の利用をすゝめたいと思ふ。

尙、注意深い讀者には直ちに判斷のつく事ではあるが著しい誤植として氣のついた點を二三擧ぐれば、三一頁、前かゝ五行目「無聲の子音が無聲の子音に變る」は：「有聲の子音に變る」の誤なるべく、一一一頁、後から四行目「上の高きに：：：」は「下の高きに：：」の誤であらう、其の外、文意の徹底には別に影響は無いが九二頁の前より七行目「畢音」は「畢克」の誤九三頁前より六行目「設批評的に：：」は「沒批評的に：：」の誤であらう。東京上駒込心理學研究會出版部發行 定價金八拾五錢。(深田武)

三富義臣君 追悼錄 增田篤夫編
今井國三君

人は畢竟一面に於ては時以上の世界に屬してゐると同時に、他面には何等かの意味に於て時劫の國に屬してゐる者だと言へやう。そして人の死を眼の當り見る事程此の事を今更乍ら深く痛感